

## 第 30 回 圧力設備規格審議委員会議事録

1. 日 時： 2018 年 8 月 28 日(火) 15:00～17:00

2. 場 所： HPI 会議室

3. 出席者（敬称略）

委 員：高木委員長(火原協)、小川(青学大)、佐々木哲也(労働者健康安全機構)、石毛(IHI)、  
佐々木駿介(東芝)、森(東芝)、寺田(神鋼)、広瀬(石油連盟)、渋谷(東京ガス)、武  
部(日本ガス協会)、小森(三井化学)、金丸(日揮)、佐藤(発電技検)、松田(ベストマ  
テリア)、朝田副委員長(三菱重工、記)

事務局：畑岸、田中(HPI)

4. 配布資料：圧力設備規格委員会－30－

1 第 29 回圧力設備規格審議委員会 議事録（案）

2-1 HPIS C 104: 2018 付議書

2-2 HPIS C 104: 2018 本体解説

3 HPIS/HPI TR での「じん性」、「ぜい性」、「き裂」の用字用語の統一提案

4 HPIS/HPI TR における量記号の表示方法に関する HPIS A 102 の修正案

5. 議 事

(1) 前回議事録（案）の確認他

事前に電子メールによって配布、確認がされていた前回議事録(案)が承認された。

先に審議した規格案の状況は以下の通り。

- ・ HPIS TR Z 110 : 2018 「フランジ締結作業トレーニング指針」は 賛成多数で可決したが、意見対応を行った結果、技術的な変更を伴ったので、再投票を行い、承認された。理事会でプロセスレビューを受けることとなった。

(2) HPIS C 104 圧力容器及びボイラ用材料の許容引張応力表 修正案審議

HPI 事務局から改正の付議について資料 30-2-1 で説明があった。

石毛主査から資料 30-2-2 で指針の内容の説明があった。

以下の通り審議があり、書面審議に入ることが承認された。本日の質問対応を行ってから、書面審議に入る。

- ・ p.28 の注記 3 で、「W」の説明では電気抵抗溶接管だけのようだが、それだけなのか。  
→溶接管はすべて「W」であり、そのように記載はしているが、わかりにくい表現となっている。JIS もこの表現だが、表現は検討する。
- ・ 「cm<sup>2</sup>」を使用しているがよいのか。また、p.35 の 5056 他での表記で、「cm<sup>2</sup>」は「cm<sup>2</sup>」では。  
→材料 JIS 規格が「cm<sup>2</sup>」を使用しているのでそのままとした。誤記は修正する。
- ・ 引用されている協会名に「一社」は付かないのか。  
→付かない協会もあり、確認する。  
→当該材料は若干強度が低く、これで問題ない。

- ・解 2 で「°F」がずれている。
- 修正する。
- ・解 7 の 1 行目で、「(・・・の申請。)」→「(・・・の申請。)」
- 拝承
- ・ p.2 で古い法規を引用しており、例えば火技解釈は 2007 となっている。
- 火力技術基準解釈はとっても良いと思うので、確認する。
- ・ p.24 で、引張試験で確認するとなっている。試験の方法の規定は不要か。
- 試験方法は追記する。

### (3)審議案件

#### a. HPIS/HPI TR での「じん性」、「ぜい性」、「き裂」の用字用語の統一提案

寺田委員から資料 30-3 で、HPIS/HPI TR での「じん性」、「ぜい性」、「き裂」の用語が統一の提案があった。

以下の通り審議があった。周りの業界に合わせる方向とし、他の業界でどうしているかを整理して、それを見た上で、次回に審議する。メンバーで各協会での情報を提供して整理する(佐藤委員→電気協会、磯村委員→高圧ガス協会、武部委員→ガス協会、朝田副委員長→機械学会)こととなり、各委員は 9/E までに事務局に連絡し、その状況を踏まえて次回に再度審議することとなった。

- ・ JIS の書き方ではどうなっているか。
- JIS Z 8301 があり、JIS は常用漢字を採用という方針。業界として用語の使い方であることを主張すれば日本規格協会としても認めるとのこと。
- ・「靱」を使うとなっているが、文科省は「靱」を使っているのか。
- 「靱」が使えるようになったと聞いているが、確認する。
- ・ JIS になれば、日本規格協会での校閲が入るので、あまり気にしなくて良いのでは。
- ・ JSME 発電用設備規格としては、提案の方針で適宜改定をしている。
- ・ ガス協会ではひらがなを使用している。常用漢字を使用するのが基本となっている。

#### b. HPIS/HPI TR における量記号の表示方法に関する HPIS A 102 の修正案

寺田委員から資料 30-4 で、「量記号は斜体、添え字は斜体又は立体を用いる。同じ HPIS、HPI TR 内ではいずれかに統一する。」とすることを提案する。

以下の審議があり、JIS や ISO での扱いを調べた上で、次回に再度審議することとなった。

- ・ 添え字も量か変数かを判断する必要がある、量であれば斜体、そうでなければ立体とするべき。例えば  $K_I$  の  $I$  は量ではないので立体にするべき。作る側は面倒ではあるが、その方が記号の意味が分かる。